



# 教皇様の敵

## ペトロの後継者は一致のきざずな

※ 二月九日、教皇様を訪れた歴史家と神学者の二団が、一九八九年に開かれた、ローマ司教の首位権に関する学際シンポジウムの発表を本にまとめ、教皇様に献呈した。以下のお話は、学者たちを迎えた教皇様が、ローマ教皇の任務についての考えを述べられたものである。

皆さんを歓迎すると共に、  
 「最初の千年におけるローマ司教の首位権」と題するこの書物をお贈りくださったことに心より感謝します。これは皆さんが、教理省と歴史哲学委員会の主催による歴史と神学シンポジウムに参加された時の成果です。(…)

皆さんのお骨折りに対して、お礼申し上げたいと思います。この著作は「研究と証言」というサブタイトルが示す通り、(異なった

研究方法を使ってさらに深く研究するに足るテーマですが) 最初の千年における教皇の首位権の歴史を述べるものではなく、ただいくつかの局面と、千年間の特に重大な時代について、完全に学問的な方法で論じています。こうして複雑な主題をわかりやすくはつきりさせているのです。

この点、皆さんの中に歴史家も神学者もおられるのは喜ばしいことです。シンポジウムのテーマが「歴史と神学」なのは偶然ではありません。これは二つの学問が協力しあった好例であり、うまく手を結べば、このような研究において双方とも益するところがあることとしるしです。

皆さんの研究分野である教皇の頃の危機と分裂を克服し、全体的に見て実質上、キリスト教社

会が信仰と善徳のうちに一致していた時期です。それは現在、非常に興味深いテーマです。最初の千年間にカトリック教会とギリシャ正教会の行く道を規定した考え方を通して両教会の間にある諸問題を再考するのは、たいへん重要なことです。

それに関連して、キリスト教発展の上で重要性を持つ出来事、九八八年のキエフの洗礼を思い起しましょう。私が使徒的書簡「エンウテス・イン・ムンドウム」(世界中に行きなさい)で書いたように、「東の教会と西の教会があり、双方とも独自の神学・学問・典礼の伝統にしたがって発展した。顕著な相違点も多かったが、東と西、ローマとコンスタンチノープル相互の間には完全に共通する所もあった。キエフ教会を受け入れ、助けたのは、東も西もない、分かれたくない教会であった(四番)のです。千年の終りごろ、ローマの司教は、ペトロの後継者としての自らの使命の普遍性に対する強い自覚を持ち続けていました。たとえば教皇ヨハネ十五世は、九九五年四

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済  
 ©1992 発行所  
 財団法人 精道教育促進協会  
 〒659兵庫県芦屋市船戸町12-6  
 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

月四日付けの書簡でこのように書いています。「神のしもべたちの中のしもべヨハネは、ローマの教皇、全世界の教師として立てられた。自身の美点の故ではなく、聖なる使徒ペトロ、全能の神から使徒の長として選ばれた聖ペトロの取次によって。」(H. Zimmermann, Papsurkunde 896-1046, I, Vienna 1984, n. 324, p. 632)

こうしてペトロの使命を継ぐ者という自覚のもとに、ローマの司

教はキリスト教暦の次の千年を迎えました。三番目の千年を目前にして、ペトロの後継者が今日全力をあげて取り組む一致の奉仕が、あの「完全な一致」を推し進めるための決定打となりますように。その一致こそは、キリストが世の救いのため生命をお捧げになったあの時、心から祈り求められたものなのですから。

御母マリアの取次にこの願いを託し、皆さんに祝福を送ります。

## 全教会のための新カトリック要理完成

1 簡素ではありませんが教会全体にとってすこぶる重要な今日の式典において、カトリック教会のカテキズム(要理)テキストを認可することのできるのは、私にとって大きな喜びです。

カトリック要理委員会会長ヨセフ・ラツィンガー枢機卿をはじめ、要理委員会および要理編纂委員会の委員を務める他の枢機卿、大司教、司教方と共に、比較的短時間の間に仕上げるには容易でなかった事業の完成を心から祝いたいと思います。

一九八五年の世界代表司教特別会議終了に当り提案されたことについては私たち全員よく覚えています。「信仰と道徳に関するカトリックのすべての教えを含むカト

リック要理・提要で、各地で編纂される要理の重要な参考文献として役に立つものを準備することでした。(最終陳述, II, B, 4)

一九八六年七月十日、私はこの提案を受けて、要理案を作るために、いくつかの大陸の司教方と聖座の関係諸省の責任者を構成員とする要理委員会を設置しました。

その間、私は細心の注意を払って皆さんのお仕事を見守り、種々の会合に出席しましたが、中でも草案作成の諸段階で私の検討に付されたとき、意見や提案、勧めを出しました。皆さんはそれらを常に快く受け入れ、真に忠実に事を運んでくださいました。

また、今回の要理本文が真に例外的と言えるほど教会の全体的な

協力のみのであることを強調すべきでしょう。事実、大勢の専門家の貴重な貢献に加えて、一九八九年から一九九〇年にわたって行われた全カトリック司教団への諮問の結果をも活用することができました。これは特に著しい貢献でした。

2 したがって、使徒聖ペトロとパウロの祭日を目前にする今日、まことに複雑なこの仕事の完了にあたり、私は喜びのうち

# マリアを黙想すれば キリストがわかる(1)

(聖母マリアの永遠の処女性を強く主張したカプア教会会議の開催一六〇〇年を記念する国際学術の閉会式に、教皇様も出席された。)

## 重大な教会会議

三九二年、教皇シリチオが聖ペトロの座に登りました。その頃カプアでは、歴史的文献によれば全体会議という名で特徴づけられる、重大な会議が開かれていました。(I.D.マンシ「新公會議録」vol.738参照) 西ヨーロッパの各地から集まった司教たちは、アンティオキアの分派問題や、神の聖なる御母の永遠の処女性を否定するボノススの教説の検討など重要な議題について協議しました。教皇シリチオは会議の経過を注意

に心から、このカトリック教会の要理書を正式に認可いたします。認可にあたり、非常に骨の折れる仕事を見事に導いてくださった主にまず感謝を捧げます。また、一定の時間内にこの困難な仕事を完成させるため、骨身を惜しまず、賞賛すべき心遣いを示してください。皆さん方お一人ひとりに心から御礼を申し上げます。さらにこの重要で期待されていた仕事完成のために色々な形で効果的な貢献を

深く見守り、ミラノの聖アンブロジオは力強く、しかも慎重な人柄を、会議において強く印象つけています。(ボノスス司教に関する書簡二)

カプア教会会議で話し合われたテーマは、これからの考察の出発点となります。私たちは神学者が信仰に照らされた理性を用いて、キリストの謙遜で栄光に満ちた御母の処女性とその意味について研究するに当り、不可欠の要件となる事柄を考察しようとしています。

## 託身された

みことばの光に照らしてマリアの処女性に関する神学的考察を裏切るものは、正し

してくださったすべての人に御礼を申し上げます。注意の行き届いた明解で総合的なこの要理書は、見事に教会の聖伝の流れの中に位置を占めてい

い出発点を求めることです。マリアの処女性という問題にはさまざまな局面があるため、マリア個人や人々の文化、当時の状況といった角度から論じ始めるのは適当ではありません。教会の教父たちは、マリアの処女性が「マリア論の問題」である前に、「キリスト論のテーマ」であることを早くも見抜いていました。教父たちによれば、御子の神としての本性が必然的に御母の処女性を要求します。それは神の自由で賢明なご計画に従って、「神よりの神」永遠の御子が人となられるための具体的な条件なのです。(コンスタンチノール公会議のニケーア・コンスタンチノール信経) 主のみ聖なり、主のみ王なり、主のみいと高し…(ローマ典礼文・栄光唱参照) こうしてキリスト教の伝統は、処女マリアが聖霊の力により、人間の介入なしに身ごもった(ルカ一・三四〜三五参照)ことを信じ、それを十字架の木(マル

カン公会議の教えを忠実に反映させており、今日の人々を対象にしたものです。このような特質と特徴のおかげで、国単位や教区単位のカトリック要理作成にとって信頼すべき参考書・重要な手がかりとなることでしょう。

3 この認可を与えるに当り、主な現代語への翻訳の準備をしてくださるよう、お願いいたします。

今後の必要な段階を経て、あまり遠くない時期に、カトリック教会の新しい要理出版記念を主催したいと期待しています。「要理教育者の母であり模範であるマリア、生きる要理であるマリア」に感謝いたします。カトリック教会の新しい要理書がキリスト教三千年目に入らんとする普遍教会の新たな使徒職および福音宣教の新しく貴重な道具となりますように。(一九九二・六・二五)

コ十五・三九参照) や墓に残されていた布(ヨハネ二〇・五〜八参照)と同様、ナザレトのイエズスが神の子であることを示す理由であり、印であると思なしています。処女マリアの母性について考える時、福音書をつらぬく問いかけ「イエズスとは何者か？」に対する答えが、全てのキリスト信者に与えられます。すなわち、イエズスはまことの神の子、まことの人の子であり、時の始まる前に御父から生れ、「時満ちて女から生れ」(ガラツィア四・四参照) 給うた御方であると。

深い敬意をもって神学者は、マリアの実りある処女性という秘義に近づ

必要であり、また賜であることを理解するためには、朽ちることのない生命の源、時を超えて永遠に存在するみことばの照らす光に従って考えなければなりません。

「燃えるやぶ、契約の櫃、栄光の幕屋、主の神殿など」をためらいなくマリアに当てはめました。それらもこの秘義のすばらしさを賛美するには不十分であると言明してました。「聖なる、きずなき処女マリア、どう言えば、御身を褒め称えることができましょうか。天の国さえ凌駕する御方を、御身はお宿しになったのですから。」(一月一日の「神の御母」の祝日の「教

# 説教・講話・書簡等の抄訳

「聖なるロザリオ」(改訂新版) ロザリオは、キリストと聖母マリアの一生を黙想する祈りです。ロザリオの祈りの深さを再発見したい全ての方に本書をお勧めします。  
福者ホセマリア・エスクリバー著 精進教育促進協会スタッフ訳 定価一三三六円 一三〇〇円

## 会への祈り(参照)

しかし、だからと言って、信仰と崇敬の念を抱いてマリアの秘義に近づく神学者が啓示の中味を調べ、それら相互の調和や関連を探り出す仕事は妨げられるわけではありませぬ。むしろ「神の深みまで全てを見透す」(1コリント二・十) 聖霊の導きのもと、豊かで大いなる神学の伝統「知解を求める信仰」の中に身を置くのです。

神学的考察が栄唱と礼拝に及ぶとき、マリアの処女性の秘義が解き明かされ、異なる局面と深遠さを垣間見ることが出来ます。

◆ たとえば、みことばが人となられたという秘義について

考える時、キリストの地上での生涯の始めと終りとの間にある、とても重要な関係を理解することが出来ます。つまりキリストの処女懐胎と死からの復活は、イエズスの神性を信じることに密接に結びついた二つの真理なのです。

それらは信仰の遺産と言われるもので、全教会が明言し、使徒信經にもはっきりと述べられています。一方を疑えば必然的にもう一方も疑うようになり、反対に、一方を謙虚に心から信じるならもう一方も暖かく受け入れるようになることは、歴史の不すとおりです。

よく知られた事実ですが、ある教父たちはキリストの(無傷の処女からの)誕生と(無傷の墓からの)復活との間に、顕著な対応関係を発見しました。(聖エフレム、ペルジウムの聖イシドロ、コンス

タンチノーブルの聖プロクロ、聖ペトロ・クリソソゴその他の著作参照) キリストの誕生について、ある者は「処女がみごもった」ことを重視し、ある者は「処女から生れた」ことを強調し、ある者は御母の永遠の処女性を力説するといった具合ですが、救いをもたらす二つの出来事、すなわちキリストの誕生と死からの復活との間に神のご計画とびつたり合った本質的な関連があることについては、誰も確信し、証言しています。

その関連は、聖霊に導かれた教会が見出したものであり、教会が作り上げたものではありません。誕生と復活との間に密接な関係を想定した教父たちの著作の中から、二つの点だけを考えてみたいと思います。一つはその古さと權威について、もう一つは二つの出来事と結び付け、その中にキリストの神性を示している並外れた明快さについてです。

まず、聖イレネオの言葉から。「ダビドは処女からの誕生と、死者のうちからの復活を預言して言われた。すなわち、真理は大地から現れると。」(異端論駁 III, 5, 1)

二番目は聖ペトロ・クリソソゴの言葉です。「マリアは墓、すなわち復活の胎、生命の誕生となつた。それは肉の胎から生れたキリストが再び信仰の墓から生れるためであった。生命を与えた方に、閉じられた墓が永遠の命を戻すためであった。出産後も処女を処女のままにとどめるのは、神にしか

できないことである。また、封印された墓から体を伴って出ていくのも、神にしかできないことである。」(説教 75, 3)

これに関して、ある学者たちが、科学的に言うにふさわしい方法で聖書を研究していたところ、福音書の本文に記された「まぐさ桶の布」(ルカ二・七、十二)と「墓に横たえるとき、キリストをくるんでいた布」(ルカ二三・五三、二四・十二、ヨハネ一九・四〇、二〇・十五、ルカ二・七)を参照、

# 祈りの共同体

## 教会シリーズ 8

(高間に集まった最初の使徒たちのように、聖母の模範に倣って、教会は絶えず祈りを捧げる共同体でなければなりません。)

1 弟子たちは、(復活された主のご昇天の後)エルサレムに帰ってきた。(…)ペトロとヨハネとヤコボとアンドレア、フィリッポとトマ、バルトロメオとマテオ、アルフェオの子ヤコボと熱心な者シモン、ヤコボの子ユダは、町に帰ってきて、いつもよく集まる高間に上つた。そして、

婦人たちとイエズスの母マリアとイエズスの兄弟たちとともに、みな心を合わせて祈り続けていた。」(使徒一・十二〜十四) これがかの共同体すなわち「教会の交わり」(コンムニオ・エクレジヤリス)

二〇・五〜七参照)との関連に気づいたことを、申し上げておきましょう。聖なる教父たちもすでにこの事実には注目していました。(聖エフレム、ナジアンスの聖グレゴリオ、トゥリンの聖マクシモその他参照) さらに、キリストの秘義についての神学的考察の中で、教会は愛を込めてカルワリオからベトレヘムの馬小屋へ至る道をたどり(ヨハネ一九・四一、二〇・十五、ルカ二・七)を参照、

「エルサレムを離れずに、私があなたたちに知らせた御父の約束を待て」と命じ、「ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたたちは間もなく聖霊で洗礼を受けるだろう」と言われた。」(使徒一・四)

2 この共同体はイエズスご自身の意志で集められたものであり、御父のもとにお帰りになった時に、弟子たちにお示しになっていたもう一つの出来事を期待しながら一致を保って一つでいるようにとお命じになったのでした。

「私は、父が約束されたものをあなたたちに送る。あなたたちは、上からの力を着せられるまで、町にとどまれ。」(ルカ二四・四九) 福音史家ルカは、使徒行録の著者でもあります。エルサレムでの教会の最初の共同体を紹介するに当ってイエズスご自身による次の訓戒を思い出させます。「食事とともにしているとき、イエズス

典礼の中ではないとも、復活祭に目を向けつつクリスマスと祝い、クリスマスと念頭に置きつつ復活祭を祝い、そしてマリアの内に、処女から生れ十字架につけられた御子と閉じられた墓から復活した御子を証する、すぐれた証人の姿を認めました。「母は自分の生んだ子らを認める。」(イスバノ・モサラベ典礼聖土曜日のミサ) (次号へ続く)

3 これら聖書の記述が示しているように、この最初の教会共同体は、やがて聖霊降臨の日、聖霊の来臨によって白日の下に顕示されるのですが、そもそもイエズスご自身の命令によるのであって、イエズスご自身が教会に、いわば教会の「形」をお与えになったのです。いま引用した聖書に、注目すべき一つの箇所があります。すなわち「食事を共にしているとき」(使徒一・四)にイエズスはこの手配をなさつたのです。イエズスが御父のもとにお帰りになった後は、聖体が常に教会共同体の表現となるものであり、キリストはその中に秘跡的に現存し給うのです。エルサレムでのこの食事には、イエズスが復活され

# 不変の教え

た主として目に見える形で出席され、友人たちと共に、しばし帰ってきた花婿としての宴を祝われたのでした。

**4** キリストのご昇天の後も、この小さな共同社会は生き続けました。「(使徒たちは)婦人たちとイエズスの母マリアとイエズスの兄弟たちとともに、みな心を合わせて祈り続けていた。」(使徒一・十四) 教会の最初の姿は、祈りに熱中している共同体のそれでありました。皆が祈り求めていたのは聖霊の賜であり、聖霊はキリストが受難以前にも、さらにご昇天の前にも、使徒たちに約束されたものでした。

祈り—共同の祈りは、教会が始まった時、その「交わり」の基本的な特徴でしたし、また常にそうでしょう。このことは、いつの時代にも、そうして今日も共同の祈り、とりわけ各教会・修道会での典礼による祈りで証明されています。願わくはキリスト者の家庭に、この恵みがますます多く与えられますように。

使徒行録の著者は、使徒たちが祈りに熱中していたことに力点を置きます。それは共同体が秩序立て、参加する、絶え間ない規則的な祈りだったのです。これが、あの始まりの後継者であり、未来永劫にわたって模範であり続ける教会共同体の、もう一つの特徴でもあります。

**5** ルカは、この祈りの「一致」、つまり心を一つにした祈りを強調しています。この事実、祈りの共同体的な意味合いを際立たせるものです。初期の共同体での祈りは、以後の教会でもいつもそうであったように、この霊的な「交わり」を表現し、これに奉仕すると共に、これを創造し、深化し、強化します。祈りのこの共同体では、違った方面からの物的・霊的な諸要素からもたらされる差異や分裂も克服されます。すなわち、祈りは共同体の霊的一致を生み出すのです。

**6** もう一つルカが強調する事は、使徒たちが「婦人たちとイエズスの母マリアとイエズスの兄弟たちとともに」みな心を合わせて祈りに熱中していた、という事です。この場合、イエズスの従兄弟たちが兄弟たちと呼ばれていますが、福音書でも、イエズスの生涯のある折々にそう呼ばれています。福音書はまた、救い主の宣教事業に大勢の婦人が加わって、積極的に参加したことを語っています。ルカ自身もその福音書の中で証言しています。「十二使徒もイエズスに同行していた。さらに、かつて悪霊や病気から解放された婦人たち、すなわち七つの悪魔が去ったマグダラと言われるマリア、ヘロデアの家令クザの妻ヨハンナ、それからサザンナ、その他にも多くの婦人たちが自分たちの財産で彼らを助けていた。」(ルカ八・二三) 福音書に述べられているこの状況が、教会共同体の初めに継続していた模様も、ル

カは使徒行録で叙述しています。これらの寛大な婦人たちは、集まって使徒たちと一緒に祈っていました。聖霊降臨の日には、婦人たちも使徒たちと共に聖霊を受けることになりました。当時すでに、教会共同体の生き生きとした体験がありました。これについて使徒パウロはこう言います。「もう、…男も女もない。あなたたちはみな、キリスト・イエズスにおいて一つだからである。」(ガラツァ三・二八) 当時、すでに教会はその全体で、キリストとの共同体に召された新しい人類の種子であることが顕示されつつあったのです。

**7** あの最初の共同体に、イエズスの母マリアが臨席していたことに、ルカは注意を向けさせます。(使徒一・十四参照) 聖マリアがイエズスの公生活に直接参加したのではないことは私たちが承知していますが、ヨハネの福音書で、聖母が二つの決定的瞬間に臨んでいたことがわかります。すなわちガリラヤのカナで「最初の奇跡」が聖母の仲介によって行われた時と、ゴルゴタの時です。他方ルカはその福音書で、聖母の重要性を、特にお告げ、エリザベト訪問、ご降誕、神殿での清め、ナザレトでのイエズスの隠れた生活にスポットを当てて見せました。使徒行録では、神の御子に人間の生命を与えた聖母が、今度は教会の誕生に立ち会い、祈り、沈黙、交わり、希望に満ちた待機に、臨席される様子を伝えます。

**8** 第二バチカン公会議が、ルカとヨハネに始まる二千年の伝統を持つ諸表現を教会憲章の最後の章に集約したのは、教会に具体化されている救いの計画の中の、キリストの御母の特別な重要性を際立たせるためです。聖母は教会の姿ですが、それは主として、キリストとの結びつきという観点からです。この結びつきこそは、前回のカテケジスで申し上げたように、「教会の交わり」の淵源です。それゆえ、この交わりの初めから、聖母は御子と共におられるのです。

聖霊降臨の日には、御母が使徒たちの共同体の中におられたことは、特別な方法でイエズスが「散っている神の子らを集めるために」(ヨハネ十一・五二)その生命を与えられたゴルゴタの丘の十字架の下で準備されたのであることにも、留意すべきでしょう。

聖霊降臨の日には「散っている神の子らを集める」ことが、聖霊の働きによって実現し始めたのです。イエズスが愛する弟子に、またその弟子によって全教会の使徒共同体に、母としてお与えになった聖母マリアは「いつもよく集まる高間」(使徒一・十三)に同席しています。それはキリストの意志によって、その教会が目指すべき「交わり」の強化を実現し、手助けするためです。

**9** このことは、いつの世にも適合し、現代でもそう、

教会の一致の典型であり、母である方に依り頼む必要をことさらに意識するのですが、公会議にもキリスト教の教えと伝統を要約して私たちに勧めているテキストがありますので、それを読んで今回のカテケジスを結びたいと思います。「すべてのキリスト信者は、神の母および人々の母に対して絶えず嘆願を捧げ、教会の発端を祈りをもって助けたマリアが、すべての聖人と天使の上へ上げられた天において、今もなお、全ての聖人の交わりのうちに子のもとで取り次ぎを続けるよう、それによって諸国民の全家族が、キリスト信者の名をいただく者も救い主をまだ知らない者もすべてが、平和と一致のうちに一つの神の民として幸いに集められて、至聖にして不可分の三位一体の栄光となるよう祈らなければならぬ。」(教会憲章 六九番 (九一・一一九)

「教皇様の声」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料六百元 二十部以上の一括購入なら送料不要

「教皇様の声」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料六百元 二十部以上の一括購入なら送料不要

**「教皇様の声」**  
年間購読者募集中!

- 年間購読料 1部 900円 + 送料 (1~19部) 600円を郵便振替にてお送りください。(神戸 3-72393)
- 教会で2部以上まとめてお申し込みになると送料が無料です。

郵便振替 神戸 3-72393